

おまけSS 走れツバメ、走れエロス

（幼馴染と媚薬と出られない部屋。LT L閑話）

※当おまけSSは本編トラック08とトラック09の間の話となっています。該当トラッ  
ク視聴後の閲覧を推奨致します。

燕は歓喜した。しかし、異性と付き合ったからには必ず避妊具…コンドームを買わねばならぬと決意した。燕には恋人がいたことが無いので作法が分からぬ。燕はつい最近まで童貞だった非童貞である。いつか童貞を卒業するだろうと十数年生きてきたが、まさか半ば強制的に失うとは思つてもいなかつた。けれども性的なことに関して人一倍…いや、その辺りは年相応に敏感であった。夕方、家から自転車で出発し、坂を越え隣町までやつてきた。  
「いやもういいわこれ」

燕はそう自転車を駐輪所に止めながらそう口にする。著名な短編小説を自分に被せていたことが急に恥ずかしくなってきた。

家の近くのコンビニやドラッグストアで済ませずにわざわざ自転車を走らせて遠くの店ま

で来たのは言うまでもない。知り合いに会つたり、店員に覚えられたりしたらめちゃくちゃ恥ずかしいからだ。

横開きの自動ドアが自分に反応して静かに開く。気怠げな店員の挨拶が店内に響く。

「……」

心臓がバクバクと音を立てて動いている。店員に心臓の音を聞かれたりしていないうだろか。あやしい動きをしていると思われて、万引きを疑われて声をかけられたりしないだろうか。不安で不安で仕方がない。

「ええと……」

店内を無駄に大回りする。直で「その」コーナーに向かつてしまるのはあからさますぎて恥ずかしい。自分の一拳手一投足を見ている店員や客などがないのは分かつてはいるのだが。ぐるりと店内を一周し、ようやくそのコーナーへと辿り着く。お目当ての物はすぐに見つかった。ずらりと並んだ色とりどりの避妊具が視界を埋め尽くした。

「…………んんんん…………」

正直、どれがいいか分からぬ。だがこんな物の善し悪しを店員に聞くわけにもいかない。値段からいって中価格帯の物を選んだ方が無難だろう。安いのは論外、高すぎる物は学生の財布には痛手だ。自分はアルバイトをしておらず、収入源はお年玉とお小遣いである。医

者の息子ということもあって同年代の人間と比較すればそこそこ多く貰っている方だろうが、それでも限られた財源だ。慎重に使わなければならない。

「……これでいいか」

無駄に派手なパッケージではなく、「ヅツヅツ」や「ニオイ付き」など自分が知り得ないような物ではなく、シンプルな物に決めた。覚悟を決めて手に取り、レジカウンターへと持つていこうとする。だが。

「……いやちょっと待った」

これだけ買うのは流石に目立つ。

「……」

足早にコーナーを立ち去り、医薬品コーナーへと向かう。置いてあつた頭痛薬と目薬を手に取り、それをコンドームの箱の上に置いて隠す。改めてもう一度覚悟を決めて、レジカウンターへと歩を進める。

「らっしゃせー」

やる気のない店員だ。今の自分にとつては、このくらいのテキトーで何も考えていないさそ  
うな店員に接客してもらうのが一番落ち着く。  
び、び、び。店員は手慣れた手付きでバーコードを読み込んでいく。

(早くしてくれ……)

決して、決して店員の手付きは遅くはないのだ。自分が焦っているだけだ。

「1551円でーす」

全て紙袋に入れられ、ホツと胸をなでおろした。  
燕は慌ただしく財布からお金を取り出し、釣り銭と商品を受け取ると小走りで出入り口へ  
と向かっていった。

\*

「……若いなあ」

店員は燕に聞こえないよう、ボソッと呟いた。

これは余談だが、燕の特徴的な出で立ち：白衣姿と、市内では有名な病院の一人息子とい  
うこともあり、長くから地元に住んでいる人間は燕のことを知っている。燕が退店した後、  
この店の店員中の話題となってしまったことは本人が知る由もないだろう。頑張って自転  
車で一時間走った燕の苦労は水泡に帰した。

駐輪場につき、買った物を鞄の奥深くにきちんとしまう。鞄の中身をぶちまけてしまわないよう、ファスナーがちゃんとしまっていることを確認し、自転車かごに載せる。

「…よし」

自転車に乗つて一目散に家に向かって全力で自転車を漕ぐ。無事帰宅し、何もトラブルが起きなくてよかったですとまた胸をなでおろした。

想定していたものとしては、クラスメイトや担任にばったり会う、物を落とす、何かしらの何かに引っかかる（職質的なやつ）「鞄を開けて中身を見せろ」なんて言われる、とか。念のため脳内ショミュレートもしていたが、徒労に終わつたようだつた。

俺はゆっくりと玄関の扉を開ける。

「燕？」

「ひやい！！！」

母親がリビングの扉からひょっこりと顔を出していた。

「おかえりー。何？そんな変な声出して」

母はキヨトンとしてこちらを見てくる。普段なら母は家にいない時間帯なのに、どうしてこういう時に限って早く帰つてきているのだろうか。

うちの母親は看護師である。日付を越えて帰つてくることは日常で、俺が家にいる時間帯に会う時間は少ないので。その分、母は俺とコミュニケーションを積極的に取ろうとしているのか顔を合わせたタイミングで何かと喋ることは多い。

しかし今日に限つては、やめてくれ！と思わざるを得ない。

「別に何もないけど」

そうだ、別にやましいことはしていないのだ。というか、人として男として正しいことをしようとしているだけなのだ。

「あーそう？それならいいんだけどさあ、ちょっと燕にコンドー…」

「ふえあ？！」

まだ家に帰つてきて一分も経つてないのに何でバレてるんだ？！

「…さんの家に行つてきてほしいんだけど。回覧板届けてくれない？」

「…近藤さん？」

向かいの家の人大だ。

「そ、近藤さん」

「い、いいけど」

「……ははーん？」

母はニヤリと笑う。

「お隣さんの家じゃなくてガツカリした？」

的外れなような、的をかすっているような。

「違えよ」

「燕、昔からお隣の娘さんと仲良くしてたし、何なら今も一緒に登下校してるし、あわよく

ばとか思ってた？」

「思つてねえっての！」

「はいはい」

「アンタさあ、素直になるところ間違えないようにしなよ？」

「う…」

耳の痛い言葉だ。それはもう、自分でも何度も何度も思つたことで、もう自分やアイツに嘘をつかずに生きたいと思つたばかりだった。

「やっぱそういうことなのねえ」

また母はニヤリと笑う。

「そういうことってなんだよ！」

どうしてこうも勘が鋭いのか。はたまた自分が分かりやすすぎるだけなのか…。

「なんでもない、なんでもない」

母は手をヒラヒラと振り、リビングへと引っ込んでいこうとし、そこで急に静止した。

「ただ、何かあつたらちやんとお母さんに言いなさいよね。自分ではもう大人って思ってるかもしけないけど、親からしたらまだまだ子供なんだから」

「何かあつたら」 も何も。

非現実的な部屋に行つた話をどうしてできるだろうか。

言つたところで信じてもらえないだろうし、そもそも部屋で起きたことなんて親には死んでも言いたくはない。

部屋へと向かう。平常心を保とうとしているが、買った物のこと、母親に言われたこと、そしてアソツのことを考えてしまい冷静ではいられなかつた。

階段をのぼっている最中携帯に着信が入つた。この音はメールだ。どうせメールマガジンだろう、そう思つて開いたが送信元の名前を見てギョッとした。アソツだ。

「明日休みだしうちに遊びに来ない？」

「うちの両親、明日一日旅行に行つてゐるし」

急いで自分の部屋に入る。

深呼吸を一つし、ケータイで文字を入力する。何度も書いては消し、書いては消しを繰り返しようやく送信できた文章は「分かった」の四文字だけだった。

「……」

ベッドに顔をうずめる。

「何で俺はいつもいつもいつもこう……！そつけない態度を取つて自分の気持ちを悟られないように嘘をついて……さあああ！」

部屋から声が漏れないよう、布団に向かって声を出す。

「明日休み……うちに遊びに来ない……」

メールの内容を反芻する。

「ああああ～～～」

うちに、遊びに、来ない？

遊ぶつて何を。ゲームでもするのか？

「…………」

いやそんなわけあるか。それはただ単に口実であって、純粹に遊びたいわけじゃないことくらい自分でも分かる。

「何を話すことになるんだろう」

少なからず、学校や勉強、進学のことについて話すわけなんてないだろう。恐らく、きっと、俺とアイツの今後の関係についての話とか……。

「今後の関係……」

急に不安になつてきた。

「もしかして」

手に汗が滲んでくる。

「…………振られるんだろうか」

思わず両手で頭を抱える。

「一晩考えてやっぱ無し、ということも十分にあり得るし」

「いや、でもでもでも、もしかしてもしかすると、いい雰囲気になつて……、これを使う時が来るかもしれないし……」

無造作に床に置かれた鞄に目をやる。手を伸ばし、ファスナーを開けて紙袋を取り出す。お

目当ては頭痛薬でも目薬でもない。

「万が一、一応…」

「それ」を眺める。

「…万が一、万が一だから。振られたら捨てればいいだけのことなんだから！」

紙袋にしまい直し、また鞄の中の奥深くに入れる。

ベッドを背にしもたれ掛かり、理由なくじっと天井を見る。若干日に焼けているが、まだ白さを保っている。

「……っ」

その白さにあの変な部屋を思い出し…、それと同時に幼なじみにしてしまったことも数珠繫ぎになつて。思わずベッドにダイブした。

「あーーー…ああー…」

枕に顔をうずめて、呻きとも叫びともつかない奇声を上げることしかできなかつた。

「きつかけがあれつて…」

もし誰かにアイツと付き合つたきつかけを聞かれた時になんて答えればいいのか分からない。あんな非現実的な空間で。非現実的なきつかけで。今まで越えられなかつた壁をいともたやすく乗り越え、：いや正確にはぶち壊された、か。結果的に俺が昔から望んでいた

ことが叶つたわけだが、本来ならばこれは自分で努力して結果を出すべきことだ。

「無理だな絶対」

即座に自分の考えを否定する。どんなに努力していたとしても、結局幼なじみの一線を越えることはできなかつただろう。

「俺のバカ」

何度も媚薬を飲まされて。何度も何度もセックスして。

一  
つ  
つ  
つ  
！」

アソコの喘ぎ声がまだ耳の中にずっと残っていた。腕も脚も胸もお尻も、俺の前に全部さらけ出されて。体の全体が赤みがかっているのかと錯覚するほど火照った体が、潤んだ瞳が、上気した頬が。

「あー無し、今の無し！」

自分が男に産まれたことを後悔するほど、股間が情けないほどに隆起していた。それに。「いくら照れてたからといって、あんなつづけんどんな態度取つて……」

「最初から素直に、手を繋ぎたいって言つてたら、あんなにキヨトンとされなかつただろう

七

考えれば考えるほど、嫌な結末しか浮かばない。

その後。晚ご飯を食べても、風呂に入っていても明日のことで頭が一杯で、習慣であつた自主學習もすっぱかしてしまつた。

「明日が来てほしいうやな、来てほしくないような…」

絶対に寝坊しないように時計のアラームを最大音量にセットしてからベッドに入り、目を閉じた。

「……眠れない」

朝日が昇つてもなお眠りにつけなかつたし、自分の心臓は静まることを知らなかつた。